

美松里型土器とその文化について : 中国・東北考古学にふれて

西谷, 正

<https://doi.org/10.15017/2230273>

出版情報 : 史淵. 127, pp.111-128, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

美松里型土器とその文化について

—中国・東北考古学にふれて—

西 谷 正

一、はじめに

朝鮮半島の考古学研究において、土器の編年研究は、つねに重要課題の一つとして重視されている。その際、留意しなければならぬのは地域性の問題である。筆者は、そのような観点に立って、すでに早くから無文土器の研究に取り組んできた^①。その点で、西部朝鮮の無文土器を考える場合、隣接する中国・東北地方における同時期の土器が大きな関心事となってくる。

筆者はかつて、西部朝鮮における一つの典型的な土器型式である「美松里型土器」に関連して、美松里洞窟遺跡出土の無文土器を取り上げ、大きく二つの型式に細分したことがある^②。しかしそこでは、いわゆる美松里型土器の分布や、その文化の特徴、さらには、その年代についてほとんど触れるところがなかった。その後、中国・東北地方や朝鮮南部における関連資料の増加が見られるようになり、そのような諸問題に触れる時期にきたように思われるので、現時点における整理を行なうことになったわけである。

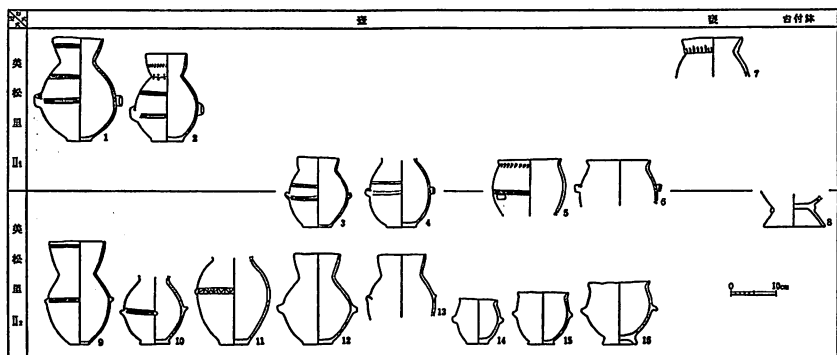
二、美松里型土器について

いわゆる「美松里型土器」というのは、一九五四年五月に発見された後、一九五九年になって発掘調査が行なわれた、平安北道義州郡美松里にある美松里洞窟遺跡（第二四一）の上層、つまり、無文土器文化層から検出された土器群を指標とし、朝鮮半島西部北端地方の無文土器を代表する一つの型式である。

器種には甕や台付鉢もあるが、資料的に乏しいのに対して、壺は一〇数個と比較的豊富である。そこで、一般に美松里型土器という場合、主として壺をさすことが多い。その壺を見ると、全体として、高さ二〇センチ内外の大きさで、ひょうたんの上下を切り捨てたような特徴的な形態を示すが、細部でいうと、広口の頸部あるいは少し外反する口縁部をもつ無頸の、丸味を帯びた胴部、そして、平底と一部に上げ底の底部をもっている。砂質の胎土には雲母を混じえ、器表面は滑らかに研磨して仕上げている。色調は、ほとんどが褐色あるいは灰褐色を呈する。壺のなかには、頸部と胴部に、数条からなる細線文様帯が数段にわたって横位に描かれているものと、まったく無文のものがある。そして、胴部に、横位の環状・口唇形・乳首形をした把手がつくものと、つかないものがある。前者にあっては、把手が一对ないしは二対、さらには二種類の把手が一对ずつつく場合などがある^③。

さて、美松里遺跡で出土した甕は、いずれも破片で数個しか検出されていない。これだけは磨研調整を行っていない。甕は、折り重ねて二重にした口縁部に、刻み目を入れた点に特長が見られる。その意味では、大同江流域を中心とするコマ形土器に通じるものである。台付鉢は、鉢部がほとんど欠失して、台脚部しか残っていない。鉢部と台脚部の境のくびれ部に、瘤状の突起が四個ついている点が特色といえる。

ところで、美松里洞窟の上層における層位と遺物の出土状況は、洞窟内の天井部からの落石や土砂の流入、さらに

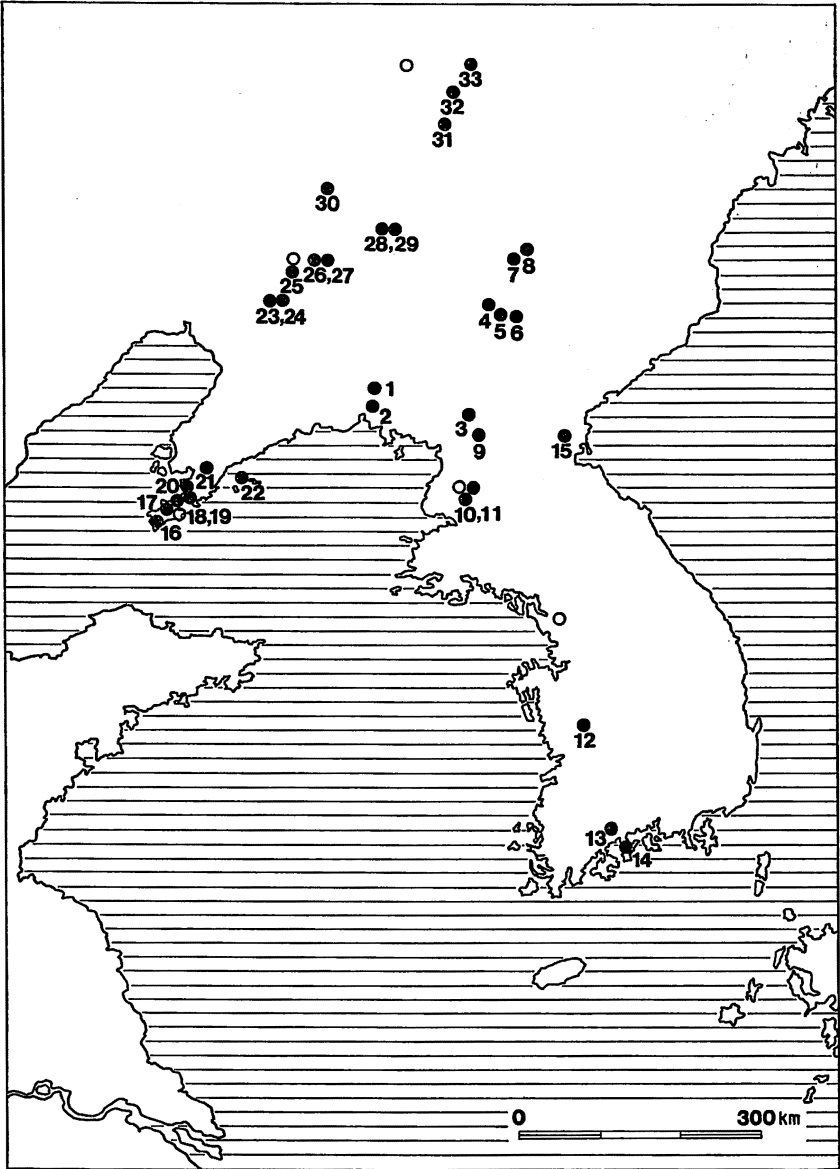


第1図 美松里洞窟遺跡出土の無文土器

は一部で地層が転移しており、攪乱状態にあった。しかしながら、出土した土器を詳細に見ると、型式的に大きく二つに細分できる(第一図)。すなわち、下層の櫛目文土器文化層を美松里Ⅰとした上で、無文土器文化層を美松里Ⅱとするが、その美松里Ⅱを、Ⅱ₁とⅡ₂に二分するわけである。両者の差異点は、広口の有頸壺にもっともよく現われている。美松里Ⅱ₁では、頸部が短かく、胴部はその最大径が下半部にあるのに対して、美松里Ⅱ₂では、頸部が大きく、胴部の最大径はほぼ中央部に上がっている。把手についても、美松里Ⅱ₁では、横位の環状であるのに比して、美松里Ⅱ₂では、乳首形ないしは口唇形となっている^④。この両者を比較すると、把手部の退化ならびに文様の簡素化・無文化という点から見て、美松里Ⅱ₁から美松里Ⅱ₂への時間的変化を考えるべきであろう。

三、美松里型土器の分布

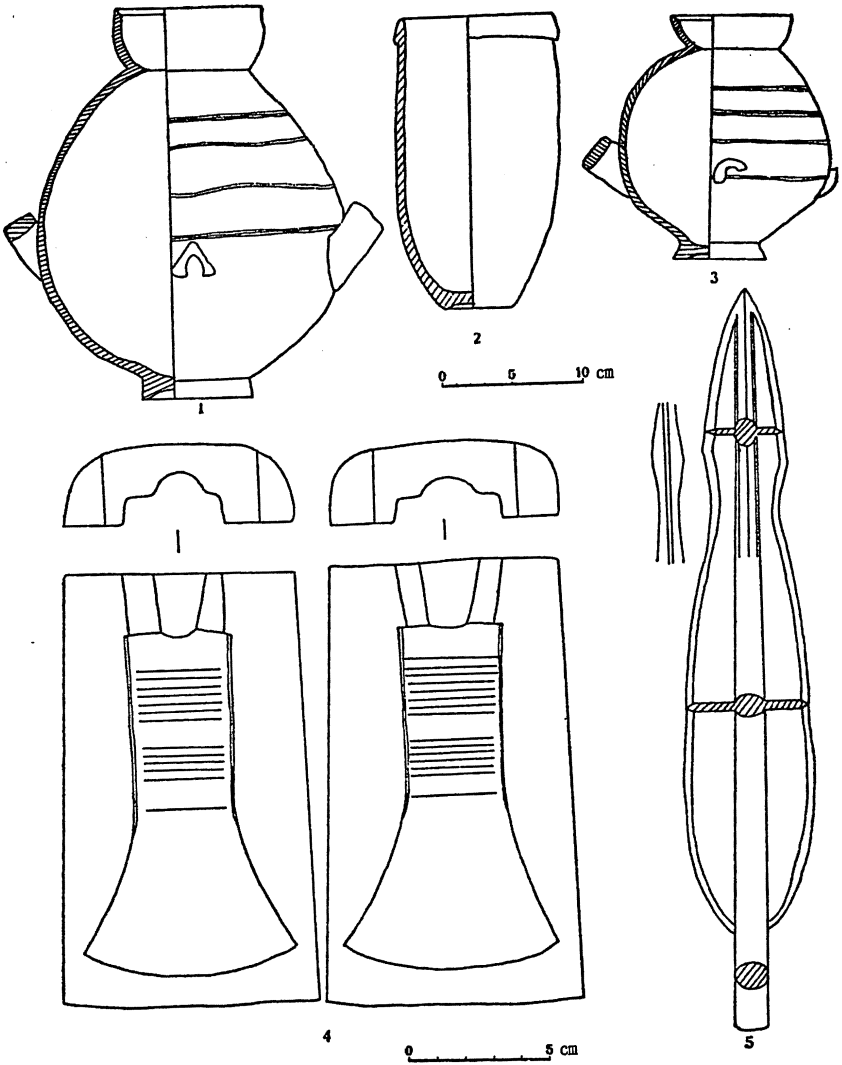
いわゆる美松里型土器でも、とくに形態的特徴が顕著な壺を中心に、その分布状況を見ておこう(第二図)。この種の土器は、すでに指摘しておいたように、朝鮮西部の北端付近から、中国・東北地方に、つまり、それぞれ鴨緑江と遼河の流域ならびに遼東半島に分布の中心がある。過去一〇年ほどの間に、朝鮮ではほとんど新しい報告例はなく、つぎに列挙する



第2図 美松里型土器および関連資料出土地分布図
(大西智和君作成)

とおりである。

- ① 平安北道義州郡美松里
 - ② 平安北道竜川郡新岩里
 - ③ 平安北道寧辺郡細竹里および九龍江
 - ④ 慈江道時中郡魯南里南坡洞
 - ⑤ 慈江道時中郡豊竜里
 - ⑥ 慈江道江界市公貴里
 - ⑦ 慈江道中江郡土城里
 - ⑧ 慈江道中江郡長城里
 - ⑨ 平安南道价川郡墨房里
 - ⑩ ピョンヤン市勝湖区域金灘里
 - ⑪ ピョンヤン市三石区域湖南里南京
- ⑫、⑬の遺跡群は、後述するとおり、関連遺跡群として合わせてその位置を示しておいた。
ところで、中国では、つぎに示すように、少しずつ類例が増えている。
- ⑭ 遼寧省大連市旅順口区于家村砬頭
 - ⑮ 同 后牧城駅双砬子
 - ⑯ 同 崗上
 - ⑰ 同 楼上
 - ⑱ 同 金県董家溝臥竜泉
 - ⑳ 同

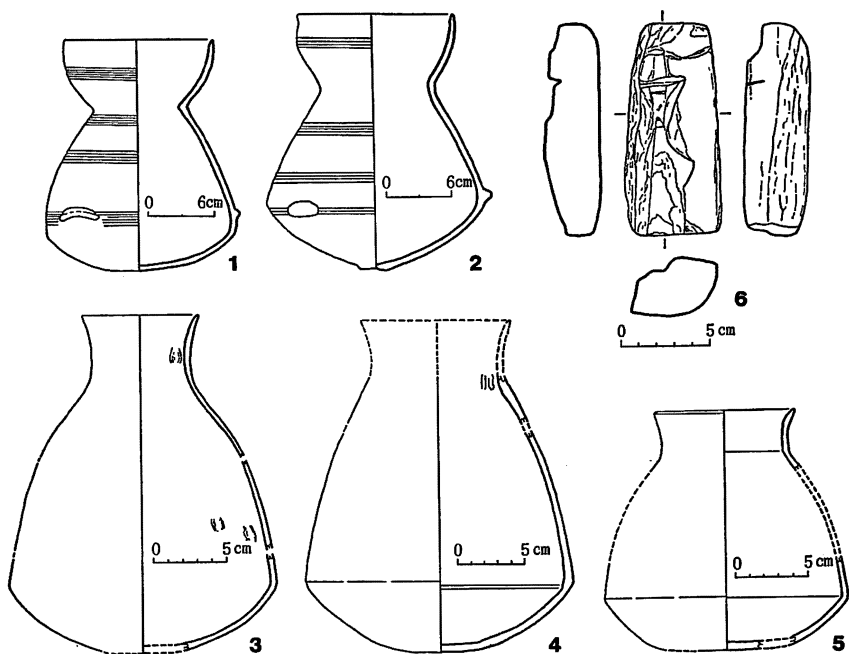


第3図 遼寧省新金県双房遺跡出土遺物
 (『考古』1983年第4期から)

- ⑲ 同 新金県双房(第三図)
- ⑳ 同 長海県上馬石貝塚上層
- ㉑ 同 遼陽市二道河子村
- ㉒ 同 接官廳
- ㉓ 同 瀋陽市肇工街
- ㉔ 同 撫順市大夥房
- ㉕ 同 大甲邦后山(甲帮)
- ㉖ 同 清原県土公子公社
- ㉗ 同 夏家卜公社
- ㉘ 同 開原県寺家台
- ㉙ 同 吉林省磐石県吉昌公社小团山
- ㉚ 同 永吉県星屋哨
- ㉛ 同 吉林市西团山

ところが、ここでもう一つ問題になるのは、美松里洞窟遺跡上層において、美松里型壺と共伴した甕である。これは、上述のとおり、折り返した二重口縁部に刻み目を連続して施すもので、朝鮮では西部でも平安南・北道の境界にも当たる清川江流域を南限としている。つまり、鴨緑江流域の美松里・新岩里や清川江流域の細竹里などの諸遺跡の出土品が代表的なものである。

この種の甕を中国・東北地方で求めると、刻み目をもたないものならば、遼寧省の双房遺跡で美松里型壺と共伴している。美松里型壺と共伴しない単独のものならば、遼寧省の瀋陽市新楽、大連市郭家村・牧羊城第一号石墓・尹家



第4図 美松里型土器および関連資料（大西智和君製図）

村第一二号墓などで認められる。同じように、刻み目文様のない甕などまで含めると、瀋陽市鄭家洼子、西豊県和隆などでも知られる。

なお、いわゆる美松里型土器の南限について考えるとき、ピョンヤン市の湖南里南京遺跡第三号住居跡出土例は注目に値する（第四図1・2）。それは、全体的な形態を見ると、胴下部から底部にかけて見られる最大径が、いちじるしく下ぶくらみをなしている^⑤、地域的変容が認められる。この形態的特徴から連想されるのは、朝鮮南部の忠清南道扶余郡草村面松菊里遺跡（第二図12）第五四地区第二号住居跡および第五五地区第六号住居跡出土の、丹塗磨研壺の胴下半部から底部にかけての特色ある形態である（第四図3・4）。ちなみに、すでによく知られている松菊里遺跡箱式石棺墓出土の遼寧式銅剣や、比較的最近に報告された松菊里遺跡第五五地区第八号住居跡出土の銅斧銚^⑥（第四図6）は、後述するように、美松里型土器分布圏

における青銅器と共通する。

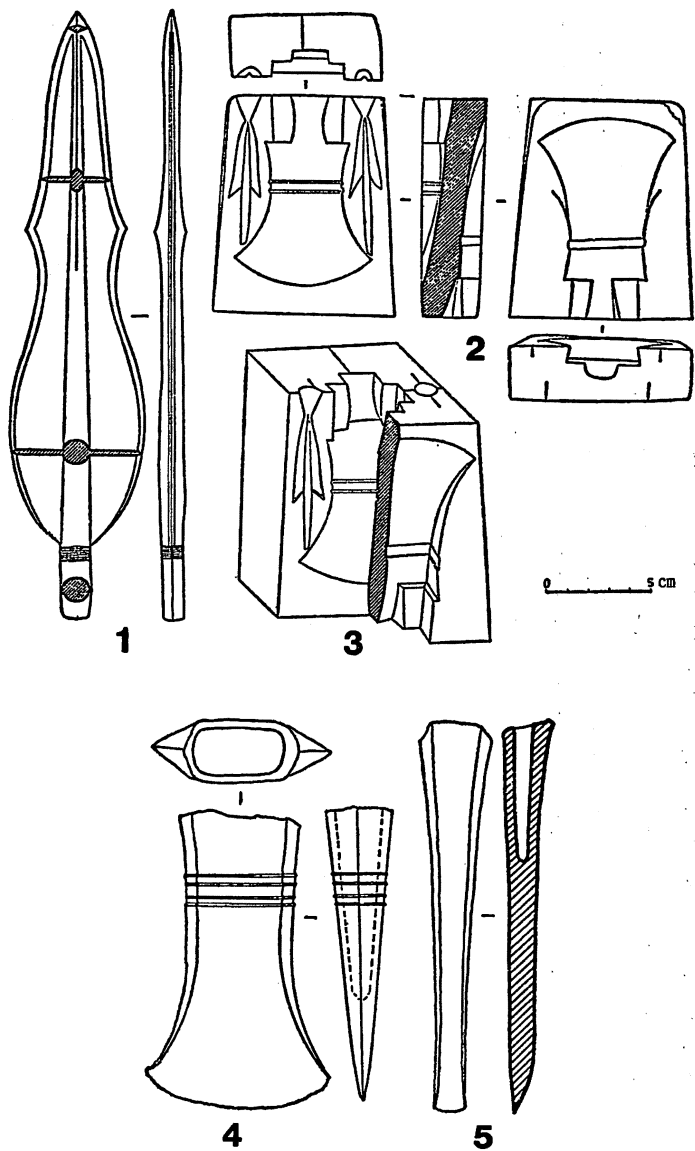
最近になって報告された、全羅南道昇州郡昇州邑柳坪里ユチョン（第二図13）の第四号支石墓から出土した赤色磨研土器の壺（第四図5）は、いわゆるナスビ形文様をもったものであるが、同じ範疇に属するものであろう。ちなみに、この付近では、同じ昇州郡の松光面牛山里ネウ第八号および第三八号支石墓をはじめ、宝城江流域において、全部で四点の遼寧式銅劍が出土している。

四、美松里型土器の文化

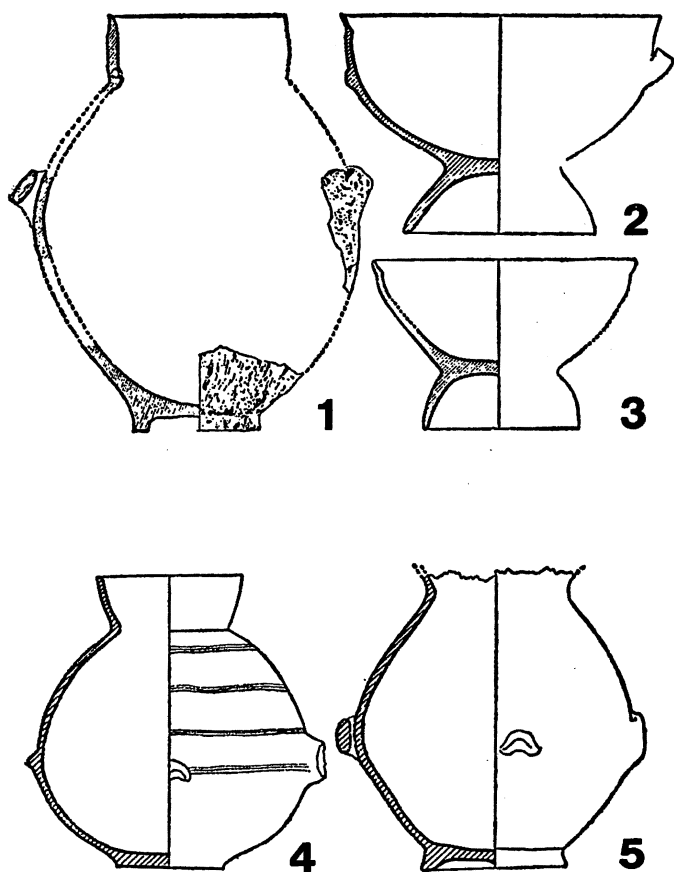
朝鮮で美松里型土器を出土する遺跡では、利器としては、一般に中国の新石器文化わけでも龍山文化の流れをくむ磨製石器が主体をなしている。ところが、美松里遺跡では銅斧を伴っている。この付近に青銅器が出現するのは、新岩里遺跡では、第三地点第二文化層であって、美松里型土器より一段階早く認められる。つまり、ここでは青銅製の環頭刀子とボタンを出土している^⑩。

ところで、美松里型土器の段階になると、典型的な琵琶形銅劍すなわち遼寧式銅劍を使用していることは、遼寧地方における知見にもとづいて、早くから指摘されてきた^⑪。同時に、遼寧地方では遼寧式銅劍とともに、銅斧・銅鑿を伴った例があり、その典型例を遼陽市二道河子村の二〇基余りからなる石棺墓群のうち、発掘調査された第一号石棺墓において見ることができるところで、副葬品として、美松里型壺一個・台付鉢二個と共伴して、遼寧式銅劍・銅斧・銅鑿各一点と、さらには、滑石製の鎔范が一点出土している。ここで、注目しておきたいのは、鎔范には、斧とともに鋸も認められるのである（第五・六・七図）。つまり、この段階では、実に豊富な青銅器群を伴っているということである。その他に、ほぼ同時期と思われる他の遺跡では、矛・鏃・鉞・刀子・錐・鈎針・ボタン・環・各種

飾なども知られるのである。その分布地域を見ても、遼寧省の遼河流域や遼東半島が圧倒的に多いが、吉林省の松花江流域まで広がっていることは注目される。ことに、銅矛を見ると、細形銅矛のように鋒部が細長く発達したものでなく、鋒部が短かく、幅広であるのに加えて、袋部が異常に長いものが見られるが、これらは、遼寧式銅剣に対応さ



第5図 遼寧省遼陽市二道河子村出土資料
 (『考古』1977年第5期から)

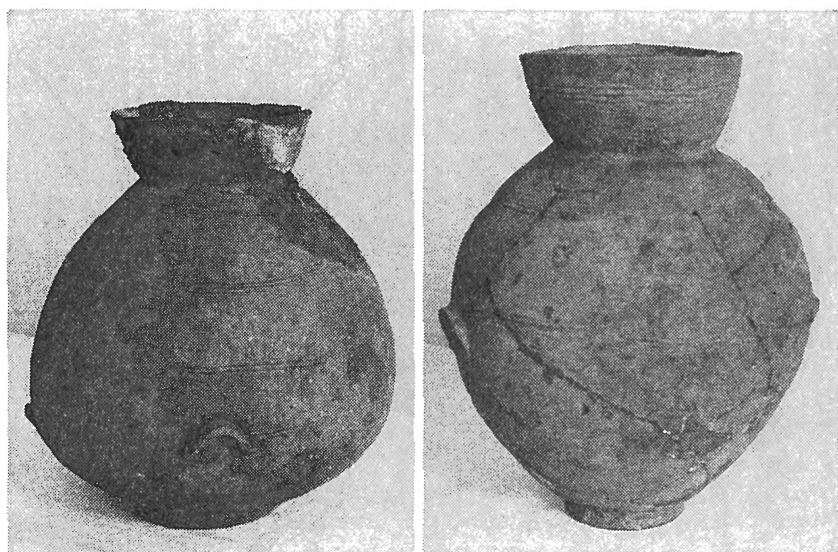


第6図 遼寧省遼陽市二道河子村出土の美松里型土器
 (『考古』1977年第5期から)

せて、遼寧式銅矛、もしくは、吉林省にも出土例があるので、東北式銅矛と呼んでさしつかえないようなものである。

末端寄りのところには、目釘孔が二個あいている(第八図4)。それに対してもう一つは、袋部の先端が一部欠失しているが、現存する全長は一三・九センチを測る。そして、長さ九・五センチの刃部は、ほぼ中ほどのところで、遼寧式銅劍の刃部に見られるような突起部をもっている(第八図3)。ちなみに、同じ清原県の夏家ト公社馬家店の石

たとえば、遼寧省清原県北三家公社李家トにおいて、一九八七年に石棺墓から、遼寧式銅劍一本・銅鉞一個とともに、遼寧式銅矛が二本出土している(第八図)。そのうち一つは、全長二一センチを測り、長さ一二・一センチの刃部はゆるやかなカーブを描く。袋部の

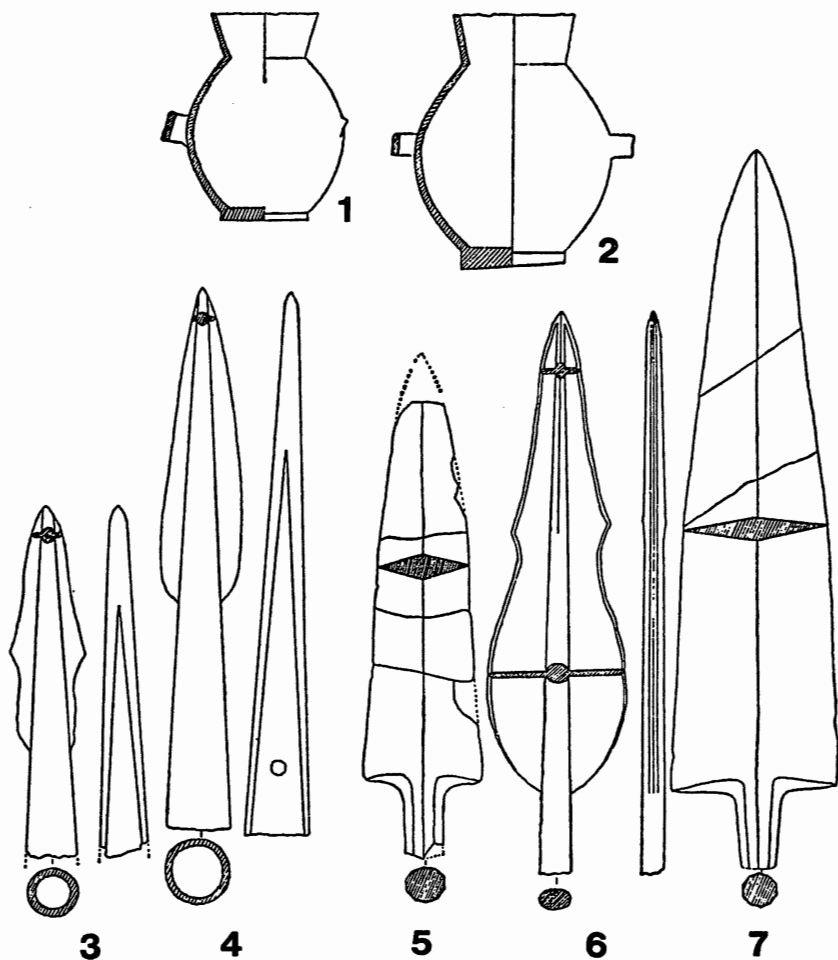


第7図 遼寧省遼陽市出土の美松里型土器（1981年10月6日，西谷撮影）

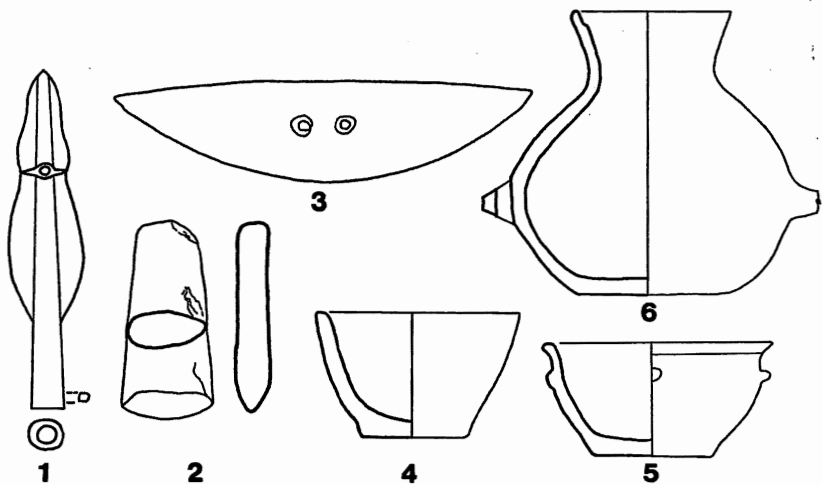
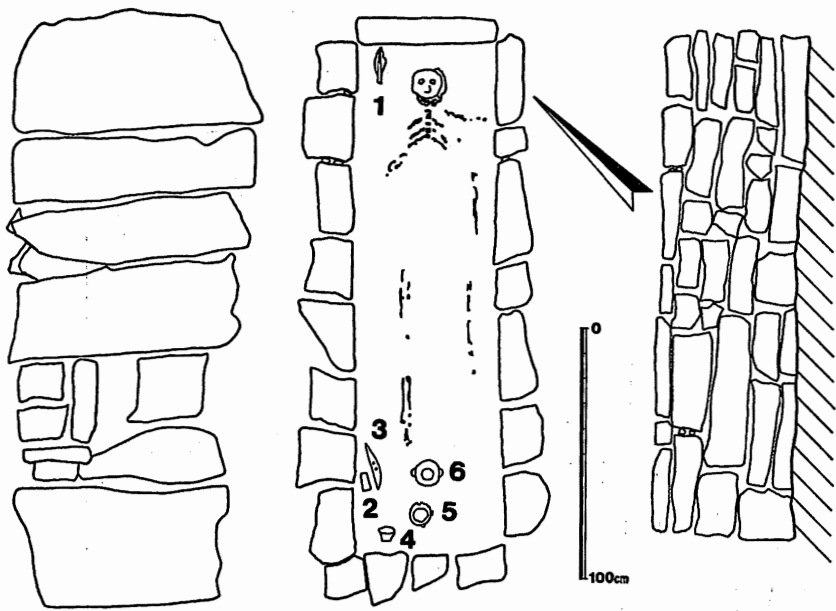
棺墓では、美松里型土器の壺（第八図1・2）と半月形の石庖丁が出土している。

ところで、遼寧式銅矛は、現在のところ、遼寧省では、他に大連市の崗上墓で一例出土しているが、むしろ吉林省においてわずかに多く出土している。吉林市付近出土で、詳細不明の一例を除いても、吉林市の北郊に当たる長蛇山遺跡では、六三M1号土壙墓から銅矛一本と瑪瑙製管玉一個が出土している^④。また、長蛇山遺跡に先行するといわれる星星哨遺跡でも、DM13号石室墓から銅矛一本が、石庖丁・石斧や土器と共伴している（第九図）。ちなみに、この遺跡の別の地点にあるAM19号石室墓では、遼寧式銅劍・石庖丁・石斧・土器が伴出している。

さて、ここで注意したいことは、朝鮮においても、いま述べてきたような遼寧式銅矛が、実は出土しているのである。それは、一九八九年一月二七日に、全羅南道麗川市積良洞の支石墓から、遼寧式銅矛が、遼寧式銅劍・銅刀子・管玉と伴出したのである（第二図14）。銅矛は、やはり袋部が長い型式で、鋒部先端など部分的に欠失し



第8図 遼寧省清原県出土の土器・青銅器・石剣
（『考古』1982年第2期から）



第9図 吉林省永吉県星哨の石棺墓と土器・青銅器・石器
 (『考古学集刊』から, 大西智和君製図)

ているが、現存する長さだけでも二五センチと長大である。この銅矛と型式は少し異なるが、同種の鎔范は、すでに早く威鏡南道永興郡永興邑遺跡（第二図15）で採集されている^⑭。同じように、遼寧式銅矛という広い範疇でいうならば、そのバラエティーの一つとして、発展型式に相当する銅矛が、ピョンヤン市内の大同江畔で出土したと伝えるものに認められる。

このように見てくると、美松里型土器の文化には、いわゆる遼寧式銅劍に特徴づけられる初期の青銅器群が含まれていることがわかるとともに、朝鮮南部における遼寧式銅劍など、出現期の青銅器の波及の背景に、美松里型土器文化の何らかの影響を考えるべきであるといえるのではなからうか。

五、美松里型土器の年代

上述したように、美松里型土器が中国・東北地方において、遼寧式銅劍や銅斧などと深い関連性をもつとして、筆者はかつて、そのような銅斧・銅鏃・ボタンなどを例に、朝鮮における金属器の起源問題を考えたことがある。その際、朝鮮における金属器の出現時期を、春秋前半すなわち西暦紀元前八〜七世紀を上限とし、戦国つまり紀元前五〜三世紀にかけてのことであると^⑮した。このような年代観は、朝鮮の美松里型土器の年代を考えると、そのまま適用してもさしつかえなからう。ただ、その後の新知見や研究の進展によって、もう少し年代幅が限定できないかという問題が残されている。

そこで、最近までの年代観を若干ふりかえておこう。まず、中国の靳楓毅氏によると、筆者らが美松里型土器と呼んでいる壺を出土した遼寧省の新金県双房遺跡や遼陽市二道河子遺跡を、中国・東北地方の遼寧式銅劍文化の第一期に位置づけた上で、年代の上限を春秋前・中期、下限を春秋中・後期あるいは後期に考えている^⑯。つきに、朝鮮で

は、黄基徳氏が美松里型壺における形態の変遷過程を、双房↓二道河子↓美松里の各遺跡出土壺の三種類に分類している。そして、それぞれに紀元前三一〇世紀、一一〇世紀、九世紀前後という年代を与えている。ここで、双房遺跡を例にいえば、上限を紀元前八世紀に考える斯楓毅氏と、紀元前一三世紀に考える黄基徳氏の間で、およそ五〇〇年というギャップが生じる。斯楓毅氏の年代観の論拠は、年代が比較的限定できる中国・中原地方の資料との対比にもとづいており、説得力があるように思える。ところが、黄基徳氏の場合、放射性炭素¹⁴Cによる年代測定結果だけに依存して、ただちには承服しかねる。いっぽう、日本では、宮本一夫氏が中国・東北地方の先史土器の編年を行なった際、さきの斯楓毅氏の年代観を支持している。さて、筆者としては、美松里型土器の上限年代については、朝鮮の金属器の開始年代とほぼ同時期と考え、基本的には斯楓毅氏の見解と同じ立場を取りたい。ただ、下限年代については、かつて戦国としたが、もう少し限定して、戦国前期ごろに考えておきたい。それは、宮本一夫氏がいわれるように、中国・東北地方において、美松里型土器壺のつぎの段階が戦国後期にほぼ併行するといふ点に加えて、朝鮮南部における遼寧式銅剣の年代が、日本における弥生文化開始期の年代である紀元前五〇四世紀ごろに相当するという筆者の年代観にもとづいている。

六、おわりに

以上、数節にわたって、いわゆる美松里型土器とその文化について、調査と研究の現状を中心に素描してきた。そこで痛感したことは、美松里型土器、ならびに、それと密接な関係のある遼寧式銅剣の分布の拡大状況を見ると、まず、地域性を設定した上で、つぎに、各地域に立脚した編年の細分化の必要性である。青銅器を例にいうと、初期には、銅鏃・刀子・ボタンなど、ごく限られたものであったものが、やがて剣・矛・斧などが現われ、さらに、それ

らも型的細分が可能であるという展望に立つとき、なおさらそのことを痛感する。

ところで、朝鮮南部では現在までに、遼寧式銅劍が西海岸から南海岸を中心とした地域において、六個以上で見つかっている。さらに、ここでは朝鮮できわめて珍しい遼寧式銅矛まで出土するようになった。繰り返し述べたような遼寧式銅劍と美松里型土器との相関性から考えて、朝鮮南部における美松里型土器の問題も、こんごに残された検討課題といえよう。

注

- ① 西谷 正、一九七五「会寧五洞の土器をめぐる問題——北部朝鮮無文土器編年のために——」『史淵』第一二二輯、二八一—三〇八頁。
- ② 西谷 正、一九七八「美松里洞窟出土の無文土器——西部朝鮮無文土器編年のために(2)——」『史淵』第一一五輯、一六五—一八三頁。
- ③ 「미송리형단지」「고고민속」一九六七년제二호(美松里型壺)『考古民俗』一九六七年第二号、四一頁。
Misongri-type Jars, *Korean Today*, 1987-10.
- ④ 西谷 正、一九七八「前掲論文」一七五—一七九頁。
- ⑤ 김용산·석광훈、一九八四『남경유적에 관한 연구』(金用珩・石光勳、一九八四『南京遺跡に関する研究』)一三二頁。
- ⑥ 国立中央博物館、一九七八『松菊里 I (図版)』『国立博物館 古蹟調査報告』第二冊、図面五四・一〇五。
- ⑦ 国立中央博物館、一九七八『前掲書』図面一一三。
- ⑧ 李清圭、一九八八「柳坪里 유천고인돌 (ユチョン文石墓)」『住岩담 (ダム) 水没地域 文化遺蹟発掘調査報告書(IV)』(87支石墓2) 三六七頁。
- ⑨ 宋正炫・李榮文、一九八八「牛山里내우 (ネウ) 支石墓」『住岩담 水没地域 文化遺蹟発掘調査報告書(II)』(86支石墓2) 一〇三頁。
- ⑩ 신의주력사박물관、一九六七「一九六六년도 신안리유적발굴결과보고」『고고민속』一九六七년제二호(新義州歴史博物館、一九六七「一九六六年度新岩里遺跡発掘簡略報告」『考古民俗』一九六七年第二号) 四二—四四頁。

- ① 김용근·황기덕, 一九六七「기원전천년기전반기의 고조선문화」『고고민속』一九六七년제二호(金用珩·黃基德、永島暉臣撰·西谷正訳, 一九六八「紀元前一〇〇〇年紀前半期の古朝鮮文化」『古代学』第一四卷第三・四号、二五三〜二五五頁)。
- ② 辽阳市文物管理所(邹宝库), 一九七七「辽阳三道河子石棺墓」『考古』一九七七年第五期、三〇二〜三〇五頁。
- ③ 清原县文化局(王运至)·抚顺市博物館(徐家園), 一九八二「辽宁清原县近年发现一批石棺墓」『考古』一九八二年第二期、二二一〜二二二、一六四頁。
- ④ 吉林省文物工作队(張錫瑛), 一九八〇「吉林长蛇山遗址的发掘」『考古』一九八〇年第二期、一二六・一三一頁。なお、筆者は、一九八一年一〇月九日、吉林省博物館において美見した。
- ⑤ 吉林市博物館(董学增·陈家槐)·永吉县文化館, 一九八三「吉林永吉星星哨石棺墓第三次发掘」『考古学集刊』三、一一〇・一一二頁。
- ⑥ 一九八九年一月二八日付『光州日報』による。同年一月二日には、全南大学校博物館に展示中の実物を観察した。
- ⑦ 서국태, 一九六五「영동읍 유적에 관한 보고」『고고민속』一九六五年제二호(徐国泰, 一九六五「永興邑遺跡に関する報告」『考古民俗』一九六五年第二号) 四二頁。
- ⑧ 『조선유적유물도감』편찬위원회, 一九八九『조선유적유물도감』(朝鮮遺跡遺物図鑑) 編纂委員会, 一九八九『朝鮮遺跡遺物図鑑』(2)、二五〇頁。
- ⑨ 西谷 正, 一九六七「朝鮮における金屬器の起源問題」『史林』第五〇卷第五号、八五〜一〇九頁。
- ⑩ 斯楓毅, 一九八二「论中国东北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存(上)」『考古学報』一九八二年第四期、四〇二〜四〇四頁。
- ⑪ 황기덕, 一九八九「비파형 단검문화 미송리유형 1, 미송리유형의 유적유물과 그 년대」『조선고고연구』一九八九년제三호(黃基德, 一九八九「琵琶形短劍文化的美松里類型 1·美松里類型的遺跡遺物とその年代」『朝鮮考古研究』一九八九年第三号) 二〜七頁。
- ⑫ 宮本一夫, 一九八五「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』第六八卷第二号、一九・二三頁。